

# 雑誌『旅と伝説』における方言研究

## Researches on Dialects described in “Tabi to Densetsu”

山田敏弘<sup>1</sup>

YAMADA Toshihiro

[キーワード Keyword] 戦前、民俗学、方言学、旅行 pre-World War II period, folklore, dialectology, trips  
[所属 Institution] <sup>1</sup> 岐阜大学教育学部 (Faculty of Education, Gifu University)

[要旨 Abstract] 『旅と伝説』は、昭和3年から昭和19年まで刊行された、鉄道を利用した旅行ガイドブックという性質をもちながらも、方言を含む各地の民俗を一般に知らしめた稀有な性質をもった雑誌であった。昭和初期の民俗学の盛り上がりに一歩遅れる形で勃興した方言学も、この雑誌と大きく関わっていくが、その関係性は微妙な様相を呈している。また、同時期に刊行されていた全国的な方言専門誌『方言』に加え、飛騨の『ひだびと』及び尾張の『土の香』など郷土雑誌との棲み分けも徐々に進んでいく。このような過渡期に長く刊行された雑誌であるからこそ、内容としては短い周期で変容していったこともうかがわれる。ここから、専門誌ではないからこそ見えてくる方言学の当時の立ち位置が検証できる。

本考察では、この雑誌と方言学との関係を考察することで、関連学問分野との間で次第に確固たる領域を築いていく方言学黎明期の呻吟に耳を傾け、一方で、「旅」というテーマがどのように方言と関わっていったかを考える。

### 1. はじめに

『旅と伝説』（以下、引用文中の繁体字は、現代用いられている簡体字に直し『旅と伝説』と表記する）は、昭和3年から昭和19年まで刊行され、全国各地の伝説を収集した雑誌である。発行は東京三元社とあり、創刊当初、毎号100ページを超える立派な雑誌であった（ただし、年によってはその2/3程度のページ数のときもあり、特に戦争末期においてはページ数が限られたものとなった）。

創刊号には、口絵に「神社仏閣諸国巡礼」、「めくら経（座頭経）」とあり、「雪ある山々の伝説」、「奄美大島に伝わる『あもれをなぐ』の伝説」、「雪と越路の民謡」、「珍風俗をたづねて」、「スキーと雪の怪」、「磐梯山麓の川上温泉」、「溪流の中に湧く下滝と川治の温泉」、「陸中温泉行楽」、「川柳温泉覗き」、「温泉案内」、「借りた槍で回礼」、「スケート大会変更」、「初詣を何処にするか?」、「牛に引かれて善光寺詣り」、「天の橋立にて」と民俗学や旅に関する考察・エッセイがならび、最後に読物文芸として、江戸での狩り込みを逃れ東海道を西へ向かう旅鳥の物語である長谷川伸による「心中破り」が載るといった具合に、旅情をかき立てる内容となっている。後には、柳田国男、宮本常一なども執筆者に名を連ね、民俗学における伝説・伝承の類いが、旅をすることによって身近となる動機を与えている構成となっている。

このような雑誌において、方言に関する記述・考察はかなりの頻度で取り上げられている。創刊号にはそれらしい考察は見られないが、方言も人々の生活の息吹を感じさせる対象であるから、雑誌の趣旨に合わないわけではないだろう。柳田国男の同雑誌への寄稿「木思石語」（第1巻7月号）に、「日本では一つの伝説が、遠く離れた十箇所二十箇所に、それぞれ独立して分布して居る場合が多いが、（中略）同胞国民の精神生活が一様で、且つ久しい間ちやうど伝説の育成に適した共通の心理を持って居たことが、一層著しい理由であった」（p.2）と述べているように、伝説・民話の類いを対象とする民俗学と、「精神生活」や「共通の心理」に育まれたことばのバリエーションを考察対象とする方言学とは共通点はある。

一方で、題名が物語るように、本誌は方言を主たる対象とする雑誌ではない。そうである以上、この雑誌への方言に関する寄稿の記述方法にはさまざまなものがある。中には、太田栄太郎による「岐阜方言(1)」（第3巻第4号）、「岐阜方言(2)」（第3巻第5号）など、地域の方言独特な語句である俚言の列挙した記述も見られる一方、特に民俗と関連付けた俚言や文法に関する先見を含む研究も見られる。ここから、専門誌では捉

えきれない方言研究の不易流行を知ることでもできよう。また、本雑誌には、方言を含んだ伝承話がふんだんに盛り込まれている。今となつては貴重な談話資料としても活用が期待されるが、当時の方言研究では取り上げられようもない資料である。

このように、『旅と伝説』は、方言記述ならびに研究のあり方のみならず、専門に囚われすぎない当時の方言に対する眼差しを捉える格好の考察対象である。また、この時代に方言をいかにツーリズムに利用しようとしていたかという、方言考現学にも示唆を与える稀有な存在である。しかしながら、この雑誌に言及する研究は、CiNiiで検索する限りわずかししか見られず、この雑誌がもっている歴史的価値はあまり知られていない。そこで、今回、方言との関連においてこの『旅と伝説』に関する考察を行なうこととした。

なお、引用文献中の繁体字は、現代用いられている簡略字に直して示す。これは、一部に現在の活字として使用されていない文字を含みすべての旧字に対応できないためである。歴史的仮名遣いは、そのままとする。また、考察中の『旅と伝説』に関する年表示は、戦前までの昭和(1925年から1945年まで)をより実感できるように、昭和表示とすることを断っておく。創刊された昭和3年は、言うまでもなく1928年である。

## 2. 『旅と伝説』に載録された方言記述

ここでは、5期に分けて、『旅と伝説』に記載された方言記述について見ていく。第1期は昭和3年の創刊から昭和6年まで、第2期は、昭和7年から昭和8年、第3期は昭和9年から昭和11年、第4期は昭和12年から昭和15年まで、そして第5期は昭和16年から廃刊の昭和19年までである。なお、この分類は、『旅と伝説』という雑誌自体の特徴による時期区分ではなく、あくまで方言記述の観点から大雑把に捉えたものである。

『旅と伝説』は、そのタイトル通り、旅という娯楽を通して地域の文化を捉えることを目的とした雑誌である。大藤(1990:44)は、その性質を「学術雑誌というよりは、一種の啓蒙雑誌という性格であった」と述べるが、各地の民俗の率直で素直な記述は、今日となつては非常に貴重な内容として受け継がれるべき点を多く含んでいる。「旅」については、同じく大藤(ibid)に、「スタートは、萩原さんという奄美大島出身の人が、鉄道省から補助金を貰って、鉄道案内・旅行案内を目的として発刊したもの」とある。前節に挙げた創刊号の内容は、まさにその通りである。また、この雑誌の宣伝広告には、本誌にも寄稿している高橋文太郎の所属する武蔵野鉄道の沿線案内のような鉄道会社のものも見られ、大藤(1990)で指摘されるように鉄道省の後援もあったことを考えると、本格的なツーリズムに、その土地ならではの建造物や風物のみならず、人々の生活によって産み出された無形の「伝説」も一役買っていたことが理解される。

しかし、「この雑誌に、柳田先生が『木思石語』という伝説の研究を発表(昭和三年八月)されて以来、民俗学関係の人が寄稿するようになり、遂には或る意味に於てフォークロアの啓蒙雑誌という性格をもつに至った」(大藤ibid)ように、内容は定まらず、またタイトルに謳われる「旅」との関係はどう保つのが、ひとつの鍵となった。そんな中で方言に関する記述は、さらに民俗学との関係で、自らの存在意義を求めて迷走していく。

### 2.1. 第1期 昭和3年～6年

最初に『旅と伝説』に方言が取り上げられたのは、第1巻第11号の岩倉市郎「南島語源雑考」である。わずか3pp.少々の記述であるが、「ゆむた」「ちゆ」「ひら」という3単語の語源を音韻的に考察するのみならず、派生語の形態論的考察も含んでいる。ここで注意したいのは、このような考察は、南島という旅の目的地を想起させるものではあるが、旅情を喚起するという意味では必ずしもふさわしい内容となっていないことである。

このような内容と題名との不整合は、いつのまにか既成事実化して、この後、旅と必ずしも関係のない方言記述は盛んになっていく。大藤(ibid)が、指摘した民俗学的性質を、すでに創刊の年の夏に帯び始めていたことを考えれば、方言記述もその既定路線に乗ったものと言えよう。翌昭和4年の第2巻では、ほぼ毎号、方言の記事が掲載されることになり、方言の記述は、『旅と伝説』の中で大きなウェイトを占めるに至る。

その方言記述の変遷を見るために、昭和3年の第1巻から翌年の第2巻までに掲載された方言に関する記述・考察の一覧表を作成した。Sは「昭和」である。

年(巻)-号	題	筆者	ページ	内容・備考
S3(1)-11	南島語源雑考	岩倉市郎	83-86	「ゆむた」「ちゆ」「ひら」という3単語の語源と派生語の形態論的考察
S3(1)-12	佐渡小木港方言	青柳秀夫	83-84	紅葉山人と芸妓小糸とのロマンスで始まる俚言集
S4(2)-1	広島の方	奥田太郎	46-48	俚言集、関東大震災後の広島県支援
S4(2)-2	福井地方の方	吉川弘中	36	俚言を思いつくまま50語挙げ対訳を付す
S4(2)-2	私の思ひ出	K H生	37-39	奄美大島等南島の俚言紹介(植物・産物関係を中心に)
S4(2)-3	筑後方言志	石橋幸雄	62-65	動植物名などの俚言に加えて終助詞、ヨルなどの文法記述あり
S4(2)-4	私の思ひ出	K H生	61-62	奄美大島等南島の俚言紹介(地文天文を中心に)
S4(2)-5	岡山方言の形容法	島村知章	61-63	オノマトベを含む形容詞の俚言集 ア～ニ
S4(2)-6	岡山方言の形容法	島村知章	56-58	同ヌ～ン及び補遺
S4(2)-7	越中の用言の活用に就いて	田村栄太郎	50-56	動詞の俚言集(形態論的分析)
S4(2)-8	越中の用言の活用に就いて(二)	田村栄太郎	45-51	動詞・形容詞の俚言集(同)
S4(2)-9	盛岡方言と山の神祭り	橘正一	50-54	俚言集、簡単な音韻解説が最初にある
S4(2)-10	直島方言	島村知章	43-45	岡山県直島の俚言集
S4(2)-11	野辺地方	中市謙三	38-42	青森県野辺地の俚言集、アイヌ語説多い
S4(2)-12	琉球方言の比喩法	金城朝永	59-61	琉球方言の比喩法の記述

方言に関するこれらの考察は、単に俚言を列挙しただけのものがほとんどであるが、中にはその土地の特徴を表し旅情を誘うような記述が含まれるものもある。一方、民俗学の観点を含む橘正一「盛岡方言と山の神祭り」(第2巻9月号)のような、方言と民俗を融合させた本格的な考察もあるが、このような例外を除けば、『旅と伝説』に収められる方言記述は、概してまだ模索段階にあると言える。

一方で、文法・語彙的な考察の水準は、低くない。島村知章「岡山方言の形容法」(第2巻5月号・6月号)や田村(太田)栄太郎「越中の用言の活用に就いて」(第2巻7月号・8月号)は、品詞毎に俚言を分類し記述を試みており、特に島村の考察は、連用修飾成分に限定した俚言集という体裁を採りながら、オノマトベを特に多く含む。記述の水準は、現代から見ても評価すべき点はあるが、では果たしてこれらが『旅と伝説』という雑誌の趣旨にあったのかと問われれば、そこには葛藤も感じられる。分析が精緻になればなるほど、タイトルに謳われる内容とはかけ離れていく。

このような記述のほかに、方言を用いた伝承話(中田千畝「うきさ物語」(第2巻7月号～10月号)や田村栄太郎「『だらのあんま』の昔噺」(第3巻2月号)など)や、その土地のことで歌われた戯曲紹介(伊波普猷「琉球の戯曲に現れた玩具」など)が見られる。これらは、むしろ、その土地の「伝説」の中で各地の方言が欠かすことのできないテーマになりつつあったことを示している。すなわち、テーマにそぐう「方言」とは、このような伝承の一部であり、直接の研究対象ではなかったのである。

編集者としても、方言記述は、意図したテーマではなかったようである。創刊号の原稿募集を兼ねた目次に続く「郷土紹介」には、「伝説(広い意味に解釈して、民謡、風俗、名物、名所旧跡記事やそれに関する写真等)を募集します。」とあるだけで、方言を特に取り上げようとした様子はない。この「郷土紹介」は、い

ったん掲載されなくなった後、第1巻7月号から再度目次の後に載せられるようになるが、その第1巻7月号では、募集対象が「伝説、民謡、口碑並びに写真」と広げられている。「口碑」は、一般に「伝説」と同義で理解されるが、あえて「伝説」と併記されていることを考えると、もう少し広く「語り継がれたことば」と捉えた方がよいかもしれない。そして、その新しい「郷土紹介」には、「我々の祖先が遺して呉れた尊いそれ等もの<sup>ママ</sup>」として、「郷土芸術（舞踊、造形）に関する物」を例示することに加えて、「余り知られて居ない各地の方言、コトワザ、謎等」と「稀らしい土地の寄稿文等」が募集対象として記されている。しかし、「余り知られて居ない各地の方言～」の前には、「面白くないかも知れませんが」と前置きがついていることは見逃せない。方言が编者にとって本意ならざる考察対象であったことが示唆されている。

この第1巻7月号は、巻頭に柳田国男による「木思石語」が載る。野村(2006)は、この柳田の一文で「伝説」が如何なるものか定義されたと述べる。雑誌『旅と伝説』は、タイトルに掲げられた語の定義すらあいまいなまま刊行され始めたとの指摘であり、この柳田の意向を受ける形で募集対象が定められたということである。であれば、「各地の方言、コトワザ、謎等」は、柳田の意向が反映されていると考えられる。

柳田は、方言圏論で有名な『蝸牛考』（昭和5年）をこの直後に著し、日本方言学の父とも称される人物である。民俗のみならず言語、特に方言に関心があったことは明白で、この昭和4年の「木思石語」では、「口碑」の中の第一種として「日々の言語」(p.7)が挙げられる。当然、ここには方言も含まれよう。これに抗う意図か、編集者の「面白くないかも知れませんが」との前置きが付いた一文が掲載された。方言は、この『旅と伝説』で望まれない鬼子だったのかもしれない。それでも「編輯後記」に繰り返される柳田への依存の痕跡は、その鬼子を育てざるを得なかった编者の葛藤がにじみ出ているのである。

このような船出ではあったが、こぎ出してみたら意外と「方言」という帆が風を受けたというのが第2巻とあったところであろう。玉石混淆の内容ではあるが、方言の記述は本雑誌において大きなウェイトを占めるようになっていくのである。

## 2.2. 第2期 昭和7年～8年

昭和6年9月、雑誌『方言』が創刊される。すると、方言に関する記述は、『旅と伝説』から姿を消していくことになる。同時期に、鉄道省運客課による「梅の名所」や「全国桜の名所」といった案内が紙幅を割くことになり、また、「旅客の葉」として全国主要駅間旅客運賃表が毎号載るようになる。一方で、各地の伝承話については盛り上がりを見せ、昭和8年の「誕生と葬礼」を特集した第6年7月号は、330pp.という大部なものとなった。方言研究との棲み分けができ、『旅と伝説』は各地の伝承に集中することで、ようやくタイトルに標榜された内容に近づいたと言ってよい。

昭和8年には、方言に関して1年間でわずかに3つの短い記述が見られるのみとなった。

年(巻)-号	題	筆者	ページ	内容・備考
S8(6)-4	備前の挨拶応答語	今村勝彦	66-67	訪問等の挨拶、贈答、見舞い、お悔やみなど、場面ごとの定型句の記述
S8(6)-8	椎葉紀行	檜木範行	39-44	宮崎県椎葉村の風俗、民謡などの記述の中に方言記述あり
S8(6)-10	信濃高井郡方言四つ	市村宏	62	否定のナナ、感動詞のアチャマ、ヤア、疲労を表すゴシテイに関する記述

第1期と大きく異なり、俚言集はなりを潜めている。

この第6巻では、柳田国男による「年中行事調査標目」が、3月号、4月号と各号20pp.を割いて掲載された。そこでは、「分類の標目には専ら其土地に行はれて居る名称を用いた」(3月号p.2)とあるように、その土地独特のことば、すなわち俚言も多く見られる。このような民俗語彙は、筆者自身も方言集に採録しようか迷うことがある。たとえば、「トシガミサマ」(ibid:7)などは、一見して俚言とは思われないが、高知県幡多郡の「オンブク(半紙を切って白米を包み正月の注連飾りに取り付ける)」(ibid:11)などは、その土地独特の

ことばである。このような民俗語彙の扱いは、方言研究に関わらないとは言わないまでも、純粋な言語研究ではない。まさに民俗学と方言学は不可分な関係にあることを物語る。

話はずれるが、市町村史における方言記述を渉猟したことがある。その中で困ったのは、愛知県でも尾張地方東部の民俗編の記述である。尾張東部では、このような民俗語彙の記述が盛んであり、反面、方言（俚言）のみの記述は少ない。大部な漁具に関する民俗語彙に関する記述は、手に負えず除外してしまった。テーマを絞って語彙を収集することが悪いことでは決してない。むしろ、その土地の生活から考えれば、生活の場面があってことばがあることは間違いない事実である。しかし、一方で、特定の生活場面や環境に依存しない一般の動作や事物に対する俚言の記述は、このような民俗語彙収集のみに重点を置くと影を潜めてしまう。愛知県尾張東部の市町村史に記述された方言語彙は、その点で網羅的でないことも指摘される。

さて、このように地域的に民俗語彙に関する収集・載録の源流は、どこにあったのであろうか。やはり、この頃に中島郡起町、現在の一宮市起町で発刊されていた『土の香』（昭和3年?～昭和22年、途中昭和12年途中から終戦まで休刊）に一因があることが推察される。主宰であった加賀紫水（治雄）は、ちょうど昭和6(1931)年、同雑誌の別巻として『尾張の方言』を刊行しており、方言を純粋な言語の研究として捉えることもされていた。その一方で、『土の香』は、尾張北部・西部の民俗学的知見を高めていくことにも寄与しており、「愛知県下の特別保護建造物」（第1巻第1号）、「私地方の年中行事」（第1巻第6号）、「愛知の民謡」（第2巻第5号～第3巻第5号）など多くの考察を世に送り出してきた。両者は、境界線を引き合うことなく両立することが望ましいが、方言記述の観点からはやや偏った潮流を尾張地方に引き起こしたとも言えようか。この点については、別稿を用意し『土の香』の立場から考察を深めなければならない。

『旅と伝説』に話を戻せば、加賀は昭和5年に「一宮地方の方言」（第3巻9月号）を発表して以来、『旅と伝説』への寄稿がない。『土の香』に専念したのであろう。また、雑誌『方言』では、毎号かなりの本数の方言に関する考察で紙幅が埋め尽くされる。『旅と伝説』が、このような民俗語彙の記述ばかりに推移していたのは、やはり、別に発表する場ができたことによって分業化が進んだと言うべきものである。

### 2.3. 第3期 昭和9年～11年

昭和9年になると、前年度の低迷が嘘のように、多くの方言に関する記述が『旅と伝説』にも見られるようになる。内田武志「餅と団子の名称（静岡県）」（第7巻1月号）や鳥取県八頭郡に関する近藤喜博「山村語彙と狩詞」（第7巻11月号）のように、その土地の風土に根ざした民俗とその名称を記述した考察の割合が増え、単に俚言を五十音順に並べた体裁の報告は見られなくなった。

全国規模の方言に関する考察を多く寄稿したのが橘正一である。橘は第2巻第9号に「盛岡方言と山の神祭り」を寄稿して以来、しばらく本誌への寄稿はなかったが、昭和9年の第7巻では、「石油をセキタンと言ふこと」（同2月号）、「河童の方言」（同5月号）、葬式の異名に関する「じゃんぼん」（同6月号）など、立て続けに全国の俚言を網羅する考察を発表している。

興味深いのは、昭和10年の第8巻1月号に掲載された熊谷辰治郎の「急迫した農村の経済を語る(-)」と題された論考である。この考察では、この前年のいわゆる東北凶作を取り上げ、農村の疲弊はすさまじいものであることを訴えている。民俗学を標榜すればこういう庶民の生活にも目を向けざるを得なくなってくるのは当然のことである。呼応するかのよう、橘正一も、この年、「ある飢饉の年に」と始まる「乞食の方言」と題した論考を発表している（同2月号）。この頃から、『旅と伝説』における方言に関する論考は、生活に密着した語句の全国調査へと考察の重点が移っていく。

岐阜県に関しては、次節にまとめるように、『旅と伝説』を通して方言に関する考察が少ない。その中で江馬修は、昭和11年「飛騨の頬かむり小屋について」（第9巻4月号）という、同時期に刊行されていた『ひだびと』に掲載された山田白馬の考察を受けた民俗学的考察を発表している。中に、飛騨方言交じりで土地の聞き取りをおこなっている点の特徴的であるが、残念ながらそれ以降、『旅と伝説』への寄稿は見られなかった。これは、昭和10年1月に飛騨考古土俗学会から雑誌『ひだびと』が創刊（昭和8年4月に創刊された前身たる『石冠』からの改題）され、昭和19年5月まで続いたことによる棲み分けが大きな理由である。『ひだびと』には、「編集部」による「飛騨方言集」が昭和10年から翌年にかけて断続的に掲載され、その後も飛

驛各地の方言に関する考察も見られる。この『ひだびと』については、別稿をしたためたいが、少なくとも飛驒に関しては考察が昭和10年以降、厚みを増していったことは間違いない。美濃についても併せて次節にてまとめて述べる。

また、『旅と伝説』に話を戻せば、それでも全国的には、この時期には多くの方言をテーマにした考察が寄稿された。昭和9年の方言に関する考察を表にすると次のようになる。

年(巻)-号	題	筆者	ページ	内容・備考
S9(7)-1	数詞を関ツた屋号-房州館山付近	館山育男	27-29	数字の中で四が忌み言葉になっているなどの記述
S9(7)-1	和泉の婚姻習俗	小谷方明	30-33(上)	民俗語彙
S9(7)-1	餅と団子の名称(静岡県)	内田武志	123-126	正月を中心に五十音順で餅の名を挙げる
S9(7)-2	海の話と語彙	内田武志	28-33	思い出話に白土幸吉調べ「茨城県那珂郡平磯町地方の漁師語彙」付き
S9(7)-2	肥前島原地方の铸件食物製法及名称	美根生	99-102(下)	団子類名称
S9(7)-2	福岡県福島地方の特殊食物語彙	記載なし(美根生?)	102-103(下)	小麦加工物名称
S9(7)-2	石油をセキタンと言ふこと	橘正一	126-127	併せて石炭の方言
S9(7)-3	囲炉裏端の生活	岩崎清美	100-104	南信州の囲炉裏端の事物語彙
S9(7)-3	琉球語と各地方言との類似語	金城朝永	125-126	『旅と伝説』に載った各地方言から琉球語にある語を選定
S9(7)-4	ねまる雑考	藤原相之助	15-25	各地方言の「ねまる」についての考察
S9(7)-4	日向・日陰の地名	山口貞夫	100-110	主に日なたの全国方言。日陰はほとんどないというが、岐阜のオンジは記述あり
S9(7)-4	ウトウ・ウラキリ、その他	A B 生	126-127	奄美大島方言に関する短信
S9(7)-5	「ヒトミ」と「ホトケ」	長岡博男	96-97	岐阜県山県村の「瞳」の意味の「ホトケ」がある
S9(7)-5	河童の方言	橘正一	98-103	伝説によく現れる河童の考察。美濃のドチロベはスッポンからと記述がある
S9(7)-6	田下駄の方言と形態	内田武志	14-16	静岡県内の調査報告
S9(7)-6	石見に於けるツララの方言	千代延尚寿	91-93	島根県西部の報告
S9(7)-6	じゃんぼん	橘正一	94-99	葬式の異名の考察
S9(7)-7	神送りと人形	柳田国男	1-31	各地の「送り」行事
S9(7)-8	奄美十島及大島に於る民具-主として運搬具と仕様法	高橋文太郎	1-13	島別。民具自体は全国的に共通のものが多く、結局、名称収集が主となっている
S9(7)-8	沖縄県の主要水産物方言集	岩崎卓爾	99	沖縄島と石垣島の魚名比較

S9(7)-9	流星の方言と俗信 其他(-)	内田武志	95-99	静岡県を中心とした星の方言と俗信
S9(7)-10	流星の方言と俗信 其他(二)	内田武志	94-99	俗信中心
S9(7)-11	山村語彙と狩詞	近藤喜博	96-99	鳥取県八頭郡の記述

なお、柳田国男は、昭和8年の第6巻3月号から翌年の第7巻4月号まで「年中行事調査標目」を毎号かなりの分量(6pp.から20pp.)で載せているが、ここでは省いた。

この再興期を支えたのは、何と言っても橘正一である。昭和11年の第9巻ではほぼ隔月で、特に民俗学に通じる多彩な観点から方言に関する考察を発表している。また、野村伝四による「南大隅方言雑誌」は、第9巻7月号、8月号、11月号、12月号と掲載され、単なる俚言集もある中、近畿方言との比較から始まり、接尾辞ジョやカタの分析、特殊な撥音便や合拗音、そして幼児語から音変化という、音韻、語彙、文法に関する幅広い分析をおこなっているなど、研究水準の向上が広く示されるように感じられる。まさに、この3年間の『旅と伝説』における方言記述は、質量ともに黄金期であった。

この活況がもたらされた原因は、なんであったのか。雑誌『方言』は、柳田国男、東条操らの寄稿をはじめ、泉井久之助、新村出や小林英夫らまで相変わらず多くの「論説」と「資料」が毎号の層を厚く保っている。『方言』が充実していたことの余波が『旅と伝説』の学術的充実に及んだと単純に考えてよいのだろうか。満州国やヒトラー独裁など、きな臭い国際情勢に対し、国内では鉄道による旅が刺激され、『旅と伝説』の旅行関係の広告も、本来の誌名の面目躍如とばかり活況を呈していく時期である。これら2誌に限らず同時代的に深めて行くには考察が足りない。いずれ他の雑誌も合わせて掘り下げたい時期である。

#### 2.4. 第4期 昭和12年～15年

昭和12年の第10巻は、純粋な方言研究に関して再び低迷への移行期であった。もちろん、それは純粋な方言研究に関してという意味であって、昔話や民俗学的考察については、相変わらず多くの考察が見られる中で、純粋に方言を言語として、語彙や文法、あるいは音声の観点から記述・研究する考察が減ったという意味である。

この期間、各地の民俗に関する考察は割合として高まっていく。早川孝太郎「鳥を追ふ詞のことなど」(第10巻9月号)では、岩手県下閉伊郡に見られる独特な鳥追い詞を取り上げているが、その地域独特の言葉である以上、これは方言に関する記述とも取れる。また、野口長義「南会津の民俗」(第11巻2月号・3月号)も、福島県会津地方の山仕事や熊狩の用語を取り上げる。このように各地の民俗を記述する中で、その土地独自の用語・名称が採取されることが多くなっている。実際に山口県萩市のある島に住み着いて、その土地の習慣から農業に関する気づいたことを名称とともに記述した瀬川清子「相島日記」(第11巻10月号・12月号)などもある。生活の中に用いられる言葉を記述するというこの雑誌の方向性は、このころ先鋭化した。

一方、言語としての方言に関する興味深い記述に、辻村太郎「訛りや身振りの分布」(第11巻7月号)がある。方言については表面的な観察に終わっているが、鼻がかった声で返事を重ねる岡山人、離れた後すぐ顔を上に向け口を開けて笑う越中人などの「癖」についての記述は、現代的な感覚で捉えても先進的である。

しかし、昭和14年の第12巻では、橘正一が「猫柳と犬の子」(同7月号)や「猫を背負った男」(同9月号)、「齒磨以前」(同11月号)、「蛙殿の葬式」(同12月号)と、方言に関する考察を発表するなど孤軍奮闘する中、それ以外の人物による考察は少なくなっていく。そして、橘は昭和15年3月病にてこの世を去る。絶筆となった橘正一(1940)は、「方言学は、採集の堆積ばかりで、整理が殆ど出来てみないぢやないか」という非難の伝聞で始まる。逝去の前月、方言研究に関する華々しい活躍の外からの、死を覚悟した必死の箴諫であったのであろう。学問の方法はいくつもあるが、ある流派による方言学の占有に苦言を呈したとも捉えられる内容である。本心はわからないが、当時の方言研究に一家言あったことは疑いない。そんな中で、『旅と伝説』が存分に考察を発表できる場となったことは注目に値する。橘の目指した民俗学と方言学の融合を、今この少ない紙幅で再検討することはできない。詳細な研究が俟たれよう。

全般的に毎号のページ数も少なくなってきたのが、この昭和14年である。戦争の影によって「旅」という娯楽全体を禁忌とする風潮の中、各地を「あるく」ことで得られる知見にこだわってきた『旅と伝説』の手法が、風前の灯火となりつつあったことが推察される。さらに、国鉄の利用に関して鉄道省運客課から注意喚起が掲載されるようにもなっていく。まさに戦時下との印象である。

このような雑誌の編集方針には、当然のことながら編集部意向も大きく関わっている。雑誌の「編輯発行兼印刷」人は、創刊から廃刊まで一貫して萩原正徳の名が挙がるが、野村(2006:116)によると、昭和15年からは後藤興善の編集となる。このことにより、『旅と伝説』には、「民俗 言語 紀行 随筆」とのコピーが表紙に入ることとなり、方針には変更があったと推察される。

## 2.5. 第5期 昭和16年～19年

戦前、物資不足もあり多くの雑誌が廃刊・休刊に追い込まれていく中で、『旅と伝説』も、この終焉に向けて変容していく。上で述べたような編集方針の変更もあってか、あるいは、昭和13年5月で『方言』が廃刊になったことが少なからず関係しているのか、第1期と同様、一定数の方言に関する記述・考察は見られるようになったが、必ずしも活況を呈するようになったわけではない。俚言集が多くなり、また方言を扱った考察の中には質の低い記述も見られるようになった。戦争は、紙幅のみならず書き手も知識の堆積をも奪っていったのであろうか。橋正一をはじめこの雑誌を牽引してきた執筆者の多くは、すでに歿している。彼らは、この雑誌の終焉をどのような気持ちであの世から見ていただろうか。

また、海外植民地の風俗を紹介することも多くなり、後藤朝太郎「支那秘境の言葉」(第16巻2月号)のように中国語の方言に関する記述も見られるようになったことも、この頃の苦勞の結果として挙げられよう。

そんな中で、地名と方言との関係を記述する考察が、一定割合、見られるようになったのは、この時期の特徴である。高橋文太郎「山と地形のことば」(第15巻1月号～5月号)は、「山」をテーマに特定の地域に限定されない記述を行い、佐藤誠八「北海道の地名に就て」(第16巻2月号)のように、特定の地域の地名考を行うものもある。地名は、方言の反映であると同時に、日本列島に普遍的に存在する古語のつながりも感じさせる。旅に出れば、その土地の地名と向き合う機会が得られる。地名学は、民俗学、地理学、言語学の総合的分野として、より探求されるべき分野である。さらに言えば、『旅と伝説』において、地名は、その書名どおり、中心となるべき内容であった。その勃興の兆しがようやく現れ始めたときに本誌は帷を降ろし、戦争の傷が癒えた頃、鏡味完二の活躍を俟つことになる。

この頃の多くの雑誌と同様、『旅と伝説』も廃刊の知らせは突然であった。第17巻1月号は、「明けまして御目出度う存じます」から始まり、戦果芳しからずと述べた後、「出版を廃される向は届出され度しとの出版会よりの要請に依り、(中略)廃業の旨申告した」と述べている。編集人萩原正徳は、「大体、本誌創刊の目的は略々達してみると私は自ら慰めてる」と記しているが、ことばとは裏腹に忸怩たる思いも伝わってくる。廃刊とはそういうものであると片付けられない『旅と伝説』という名が背負ったものの今後の発展が途絶えたことへのことは、周囲にどう捉えられたのであろうか。『方言』はすでに廃刊して久しく、多くの同類の雑誌が時流に沈んだ同時代、最後の雑誌に対する思いを垣間見ることは容易ではない。しかも、この雑誌は、冒頭でも述べたが、CiNiiで検索する限り言及されることも少なかった。書名、内容の変遷もあったが、長く続いたのは、公的な支援があったことに加え読者が一定数いたからなのだろう。その大衆性は、専門誌とは一線を画し、一般人にもわかりやすく方言を説き、またその利用もしてきたことに表れていると考える。

## 2.6. まとめ

ひとつの雑誌の変遷を、方言学という観点から概観してきた。その結果、この雑誌ほど、方言に対して、正面から、そして斜から関わってきた雑誌はないということが、実感として感じられた。それは、この雑誌の広告に終始現れていた「旅」をコンセプトに置いていたからに他ならない。現代でも、旅先でこそ方言は実感されるものである。方言看板など「意図された方言使用」に対する考察も始まっているが、そのような展望(パースペクティブ)の源流は、この『旅と伝説』にあると言っても過言ではないだろう。

三四半世紀をすぎた現代から解像度の悪い遠めがねを用いて回顧するには、多くの問題点を含むこのよう



な手法は、今後、『土の香』などのこの地域の雑誌や、國學院などの同時代の雑誌を包括的に考えることによって鮮明に見えてくるまでのつなぎでしかない。

さらには、雑誌『方言』をはじめ、昭和初期に刊行されていた多くの方言を扱った雑誌との同時代的相関を考えねばならない。一方で、本考察では入手・検討が間に合わなかったが、橘正一が昭和5年からわずかな期間編んだ『方言と土俗』をはじめ、いくつかの民俗学における方言の考察もこれから照らし合わせていかなければならない。本考察は、ほんの端緒と言った拙文である。それでも、方言研究の黎明が紆余曲折の中にあつたことは垣間見られたであろう。

### 3. 岐阜県に関する考察

最後に『旅と伝説』における岐阜県に関する考察にもまとめておきたい。とは言っても、上でも触れたように、方言に限らず、岐阜県を中心に取り上げた考察は少数である。

年(巻)-号	題	筆者	ページ	内容・備考
S5(3)-4	岐阜方言	太田栄太郎	87-94	参考資料からのまとめ
S5(3)-5	岐阜方言(二)	太田栄太郎	63-71	参考資料からのまとめ
S11(9)-4	飛騨の頬かむり小屋について	江馬修	90-94	「ひだびと」掲載山田白馬考察を受けた考察。飛騨方言交じりで書かれる
S15(13)-5	美濃揖斐郡徳山村郷土誌	国枝春一・廣瀬貫之	55-63	宗教、産業等に続き、動物や狩に関することばあり
S15(13)-8	奥美濃の民俗	高橋文太郎	6-12	徳山村の民俗
S18(16)-10	美濃国可児郡小泉村の伝説(一)	木全圓寿	41-42	城山の金の鋼鉄などの記述
S18(16)-11	美濃国可児郡小泉村の伝説(二)	木全圓寿	29-30	忠五の墓の言われ、蟹薬師の由来など

このほかに、山口貞夫「日向・日陰の地名」(第7巻4月号)に飛騨の「日陰」に関する方言の記述があったり、高橋文太郎「山と地形のことば」(第17巻1月号～3月号)に飛騨の山の名称に言及する記述があったりするなど、一部に岐阜を含む考察はある。また、高橋文太郎「奥美濃の民俗」(第13巻8月号)及び木全圓寿「美濃国可児郡小泉村の伝説」(第16巻10月号・12月号)は、純粹に民俗学的考察である。しかし、これらを含めても、岐阜県に関する考察は数えるほどである。特に、岐阜の方言については、太田(1930)の2編のみであった。

創刊者が奄美の出身であることも、確かに論考が南方に偏った原因かも知れないが、岐阜県に関する記述が少ない理由はそれだけではない。近畿地方や関東南部、それに東海地方の考察が全般に多くないことは、日本列島の中で相対的に見て特異さが少ないためでしかたがないこととも考えられよう。しかし、こんなことは真の理由ではない。静岡県については、内田武志が多く『旅と伝説』に寄稿をしており、また、『土の香』の加賀紫水のように、愛知県の方言記述に尽力した人物がいたこと。また、事実、岐阜県の方言は考察すべき現象に溢れている。単に研究者が育ってきえていなかったためである。

岐阜県に関しては、飛騨地方で学術探求が見られたことは2.3節で述べた。飛騨考古土俗学会による『ひだびと』は、昭和10年から昭和19年まで刊行された。このような研究の層の厚みが、戦後の飛騨郷土学会『飛騨春秋』(1956-2006)、そして2009年から現在刊行中の『斐太記』まで続く飛騨の学術研究の強みである。一方、美濃地方は、戦後21年経ってようやく美濃民俗文化の会による『美濃民俗』が刊行される。郷土教育のなんたるかは、こういうところに現れる。

方言に関しては、「岐阜方言」(第3巻4月号・5月号)を寄稿した太田栄太郎は、富山県出身である。全国各地の書誌録などの収集に努め、各地に方言資料を多く残された先達である。「岐阜方言」は、県内各地の

方言に関する記述を収集した太田がよく採る手法によるものであるが、今では散逸してしまい確認できない文献からも引用がなされており、その功績は大きいと言えよう。ただ、残念なことは、それに続く方言に関する学術研究が、戦前、当地に芽吹かなかったことである。全国を相手にする研究者は、特定の地域を丹念に見ることに於いて地元の研究者に叶わない。しかしながら、いつも全国から研究者を連れてきてはその威を借ることで箔を付けようとする地域もある。言語のみならず、岐阜の地域文化に対する研究の低調さは現在に続いている。その土地を語る人材は、その土地で育てなければ一過性のもので終わってしまうのである。

#### 4. おわりに

コロナ禍における方言研究が、この令和2年度及び3年度は多く考えられ発表もされた。リモート機器を用いた調査の中には、年配の被調査者のお宅に機器使用の補助者が出向くという方法もあった。それならば実際に、そこで調査をすることも可能であるのかもしれないが、それぞれの研究者の苦労・工夫が思い浮かぶ工夫も多くなされた。筆者も、図書館閉館で資料収集もままならないまま、もっぱら在宅での方言研究に勤しんだ。その結果のひとつが、この拙稿である。

しかし、「禍」は、すでに始まって久しい。大学・地域にもよるのであろうが、調査に出かけることもままならない状況の中、自分自身は書誌研究を中心とせざるを得ない状況が続いてきている。そんな中でも、過去の研究から岐阜方言とそれをとりまく環境を学ぶことをこうして掘り起こし続けていくことが、せめて私自身ができることと思ひ、続けていく。

#### 参考文献

- 荒山正彦(2009)「郷土とツーリズムの接合」『日本地理学会発表要旨集』255-255  
岩手県立図書館編(2020)『おらほのことば～橘正一没後80年～』岩手県立図書館  
大藤時彦(1990)『日本民俗学史話』三一書房  
橘正一(1940)「方言研究の立場」『國語研究』第8巻第5号、國語學研究會、1-12  
野村典彦(2006)「名所との決別としての『木思石語』 -雑誌『旅と伝説』のあるき方-」『口承文藝研究』29, 111-123

#### 謝辞

この考察の端緒となったのは、CiNiiで『旅と伝説』と入れてヒットした唯一の論文である荒山(2009)であった。荒山(2009)及びそこに紹介された大藤(1990)に関して、岐阜大学教育学部社会科教育講座教授の大関泰宏先生にさまざまにご教授いただいた。また、橘正一関連の資料については、岩手大学他非常勤の竹田晃子氏にお教えいただいた。ともに感謝申し上げます。ただし、文責はすべて筆者にある。

#### 付記

本研究は、科研費基盤研究(A)「『全国方言文法辞典』データベースの拡充による日本語時空間変異対照研究の多角的展開」(課題番号20H00015 研究代表者:日高水穂)の成果の一部である。

(令和4年1月4日受理)